

日本文化の基層と境界線

Fundamental layers and boundary lines of Japanese Culture

平澤 洋 一

要旨：日本文化の境界線を詳述した論文は管見に入らない。現代方言の区画図は現在の地域文化を反映してはいるが、日本文化圏の基層を認定する基準にもなりうるのだろうか。基層決定には血液型・石器分布・植物分布・人間文化層などを考慮した総合的な見地からの考察が求められ、現代文化圏の確定には植物分布・方言区画・民俗層・人間文化層などが重要な基準となりそうだ。

キーワード：日本文化、基層文化、小文化圏、境界線

1 はじめに

数年前までの通説では、日本人の祖先は今から約1万年前に大陸から移住し、稲は弥生文化期に中国南部や朝鮮半島から大和に、中国南部から南西諸島に伝播した⁽¹⁾としてきた。これに対し、NHK「日本人はるかな旅①アンコール」(2001.12.23 PM 9:10～)は、約2万3千年前の氷河期のシベリアに高文化圏があって1万5千年くらい前に日本に原人が移住、「日本人はるかな旅②アンコール」(2001.12.24 PM 9:10～)では、稲作はすでに縄文前期に行われていたと放送した。

また、このことは、日本文化基層の考察に重要な示唆を与えた。本稿では文化を「ある地域の人間が認知し分類し行動する諸様式」と定義し、文化は言語文化に限定されず、ノンバーバルなしぐさ(ミミック)や行動を含み、個人の認知する文化や個別事象を個別文化、地域の基本的・普遍的な文化を普遍文化と定義⁽²⁾して論を進めていく。日本の言語文化圏認定基準の一つとして方言区画がよく使われ、例えば五大方言区画(東部方言、八丈方言、西部方言、九州方言、琉球方言)はそれぞれの文化圏の一面を表してはいるものの、方言区画がそのまま地域文化に重なるのではない。また、古代日本文化の基層と、現在の文化層とが同じであるわけがない。とすれば、文化圏を厳密に確定するには、どのような認定基準が必要になるだろうか。

2 日本文化の基層

日本文化の小文化圏の基層を検討するため、(1)日本民族の基層、(2)植物文化の基層と境界線、(3)古代文化の境界線、(4)人間文化の基層と境界線、の4視点からみる。

まず(1)の日本民族の基層については、日本民族バイカル湖畔起源説を唱える松本秀雄(1992)が興味深い指摘をしており、人種の違いが識別できる血液型である「Gmab³st遺伝子」の調査では、日本民族は一部例外を除いて遺伝学的にまったく等質であり、これと同類の遺伝子型は、図1に見るとおり、発祥の地と推測されるロシア・バイカル地方から



図1 Gm遺伝子の分布(松本秀雄 1992)

中国北部・北朝鮮・韓国一帯に分布する⁽³⁾。

一部の例外とは佐渡・飛島(秋田)・奄美・宮古・石垣・与那国をいい、アイヌと佐渡の人々は一般の日本人と比べて北方型蒙古系民族の特徴である「青のag遺伝子」が強く、南方型蒙古系民族の特徴である「赤のafb¹b³遺伝子」の影響が少ないので、一般の日本人集団よりもより古い集団である⁽⁴⁾とする。また、アイヌと奄美・宮古・石垣・与那国の間には等質性がみられる⁽⁵⁾という。これらの地域が他の地域と異なることは、現在の当該方言の特徴と分布からみても首肯できる。

また、北方型蒙古系民族は日本民族のほか、「北は朝鮮民族とモンゴル族、南は中国の西安と杭州の漢民族を結ぶ線が境」となり、その間に存在する漢民族は北方型蒙古系民族と南方型蒙古系民族の中間の型を示す⁽⁶⁾という。

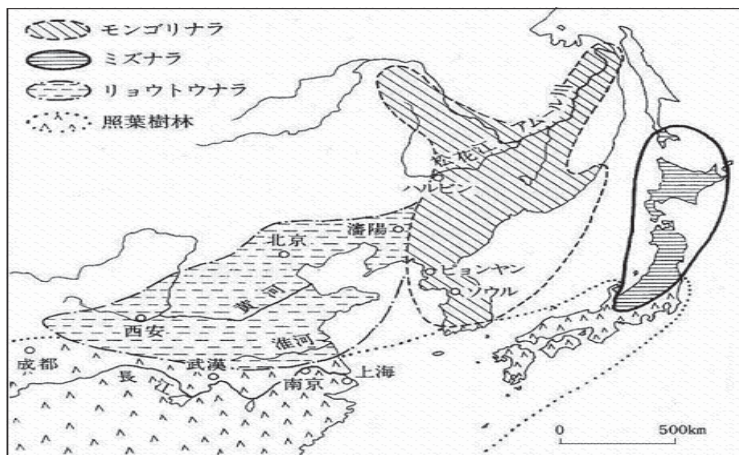


図2 ナラ林文化の分布(佐々木 1993)

我々は氏のGmab³st遺伝子のご研究から、a)日本民族の最古層は北方系の色彩が強いこと、b)佐渡島と宮古・先島諸島が日本の中でもっとも古い地域であること、この二つの事実を突きつけられたことになる。

次に、(2)の植物文化の基層と境界線については、ミズナラ帯の分布が一つの重要な決め手となる。ミズナラ帯は、佐々木孝明(1993)のご研究では図2のような分布となり、北海道から中部地方の山岳部までがミズナラ帯、ハルピンと瀋陽をつなぐ線より東側でアムール川流域から朝鮮半島南まで分布するのがモンゴリナラ帯、華北一帯に広がるのがリョウトウナラ帯、中部地方山間部および富山・石川の沿岸部や南関東・東海の太平洋側から揚子江流域の南を重慶・昆明の西へと続く⁽⁷⁾のが照葉樹林帯である。

モンゴリナラ帯にはハルピン・ピョンヤン・ソウルなどの地域があり、照葉樹林帯には貴陽・武漢・長沙・南京・上海などの地域や長江の流域が、リョウトウナラ帯には西安・北京・瀋陽の都市部や黄河の流域などが含まれる。ミズナラ帯にはナラ類、ブナ、クリ、カエデ、シナノキなどの落葉広葉樹林が、照葉樹林帯には常緑のカシ類、シイ、タブ、クス、ツバキなどの常緑広葉樹林が広がる。

ミズナラ帯では縄文式文化が基層として広がり、照葉樹林地域では縄文文化、といっても東日本のそれに比較するとその上に弥生式文化が新しく展開することになるが、佐々木孝明(1993)は、「水田稲作という先端的生産技術のほか、新しく伝来した文化要素は武器や祭器や宝器あるいは支石墓など非日常生活にかかわるものが多く……照葉樹林文化の特色によって色濃くいろいろとられていた西日本の縄文文化から日常生活文化の多くを受け継ぎ、その文化体系のなかにとり入れられた」⁽⁸⁾と考える。図4に示した日本主要部の森林の分布は、坪井(1982)が説いたように、図4の焼畑農業が残存しない地域に図5の餅なし正月の分布洋文をほぼ入れ込むことができ、両者は相互補完的な分布の様相を見せる。

3 古代文化の境界線

前出(3)の古代文化の境界線は、どのようなものであったか。これを解くには少なくとも、a)縄文時代細石刃文化^{さいせきじん}の分布、b)縄文前期の土器の分布、c)縄文中期の土器の分布、d)縄文晩期の土器の分布、e)弥生前期の土器の分布、f)焼畑農業圏の分布の6視点から考察する必要があるようだ。

前出の松本秀雄(1992)はGmab³st遺伝子の構成を根拠にして「まずアイヌ民族が日本列島に先住し、その後日本人の祖先たちが入って来た」と推定し、「紀元前1万3千年頃のもの」と判断される細石刃がバイカル地方から広く日本にかけて発見されていることから、考古学的にも裏付けられる」とし、その時期は今からおよそ1万数千年前である⁽⁹⁾とする。

佐々木孝明(1993)は、細石刃文化の流入は今から1万3千年前頃(旧石器時代第Ⅲ期)、縄文時代の草創期は1万2千年前であり、その縄文文化の分布は東日本のナラ林帯(落葉

広葉樹林帯)に集中し、第2期は6千年前(漆など照葉樹林文化の伝来)、第3期は3千年前(稲作文化の伝来)、第4期は1750年前(古墳時代)である⁽¹⁰⁾と説く。細石刃は長さ20ミリ、幅3~4ミリの石刃、細石核は同一規格の細石刃を連続的に剥がし取るために加工された原石をいい、東日本にクサビ形細石核の文化圏が、関東以西に半円錐形細石核の文化圏が広がっている(図3参照)。この勢力関係は、縄文晩期の土器の分布、つまり東日本の亀ヶ岡文化圏と西日本の突帯文文化圏の勢力図にかなりの部分で重なっている。

このような分布は、b)縄文前期の土器の分布、c)縄文中期の土器の分布、d)縄文晩期の土器の分布、e)弥生前期の土器の分布、においても大きな変化は見られない⁽¹¹⁾ことから、東西の2大文化圏は縄文時代草創期にはかなり明確な勢力圏を有して対立していたことが分かる。

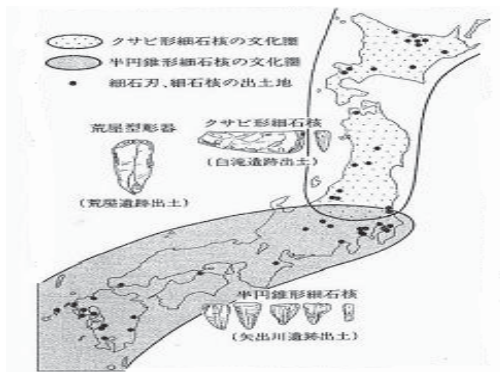


図3 細石刃文化の分布(佐々木 1993)

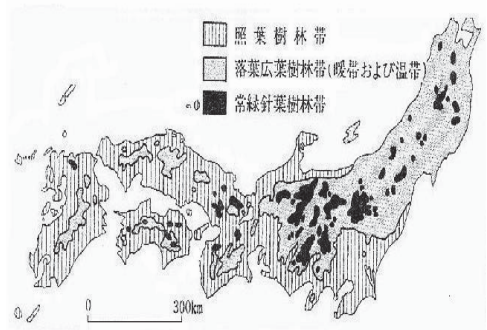


図4 主要部の森林帯(佐々木 1993)

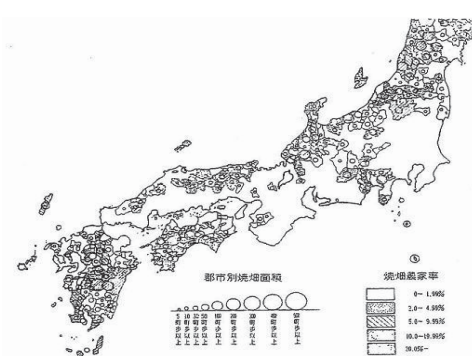


図5 焼畑農業の分布(佐々木 1972)

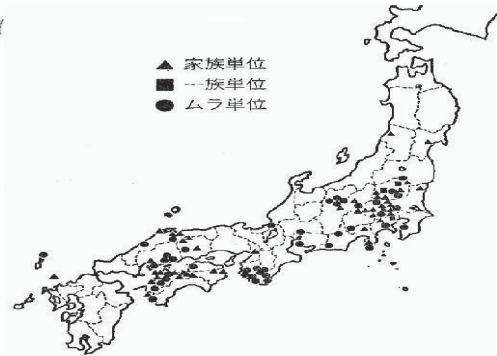


図6 餅なし正月の分布(坪井 1982)

では(4)の人間文化の基層と境界線についてはどうか。これについてはa)性格気質の地理的分布、b)気質の地理的分布という2要素の全国分布が興味深い。宮城音弥『日本人の性格—県民性と歴史的人物』(1977)の県別データをExcelの表にまとめなおしてから多変量解析すると、躁鬱質が強い勢力をもつ地域が西日本を中心に広がり、分裂質のそれは東日本に多く、これは縄文時代細石刃文化における「クサビ形細石核文化圏」と「半円錐



図7 躁鬱質の分布



図8 分裂質の分布

形細石核文化圏」の分布と重なるところが少なくない(図3、図7および図8を参照)。

この分布は常緑針葉樹林帯(東日本)と照葉樹林帯(南関東・西日本)の広がり、縄文式土器文化圏(東日本)と前期弥生式土器文化圏(西日本)の分布、イルとオルの分布などとも一致度が高い。

これまで見てきた(1)日本民族の基層、(2)植物文化の基層と境界線、(3)古代文化の境界線および(4)人間文化の基層と境界線からの分析結果をもとに総合的に判断すると、次の小文化圏が日本文化の基層として存在した可能性がある。これらの中で最も古いと考えられるのが佐渡と宮古・先島の2地域である。

1. アイヌ文化圏
2. ミズナラ文化圏(落葉広葉樹林帯+常緑針葉樹林帯、南関東・東海・富山・石川などを除く東日本)
3. 焼畑文化圏(沿岸部を中心にした東北から九州まで)
4. 餅なし正月圏(関東・中部地方山間部・紀伊半島南西部・瀬戸内地域の一部など)
5. 佐渡文化圏(日本民族の古層の一つ)
6. 照葉樹林文化圏(南関東・東海の沿岸部、西日本)
7. 隼人文化圏(九州中央部の一部)
8. 琉球文化圏(沖縄本島および諸島)
9. 宮古・先島文化圏(日本民族の古層の一つ)

田中 琢・佐原 真(1993)には、縄文人と弥生人の民族的系統について示唆深い記述⁽¹²⁾が見られる。

人類の歯はしだいに大きさを減じている。1000年で約1%の減となる。アメリカのC.L.Aブレイスさんと永井昌文さんは、日本での調査でつぎのような結果を得た。

- (1) 縄文人の歯より、アイヌの人びとの歯は小さい。
- (2) 北部九州の大陸系弥生人の歯よりも、現代の福岡・京都の人びとの歯は小さ

い。

(3) しかし、現代の福岡・京都の人びとの歯の方が、縄文人の歯より大きい。

この結果から得られるのは、(A)アイヌの人びとの歯は縄文人の歯の系統をひくととらえて矛盾はない、(B)福岡・京都のひとびとは弥生人の歯の系統をひくととらえて矛盾はない、(C)しかし、福岡・京都の人びとの歯は縄文人の歯からはみちびきえない<下略> (91~2頁)

奄美大島と沖縄本島一帯は、縄文時代には本州諸島と同一の文化圏に属していたが、弥生時代以降になると、ことなつた文化をもち、別の政治の道をたどり、一五世紀には琉球王国の建国に到達する。

これに対して、南半の八重山諸島には縄文文化も弥生文化も及ばない。ここでは、まず厚手の土器と石斧を主体とする多量の石器をもつ文化が出現する。この文化の前半期の遺跡では、いまから三千数百年まえとする炭素14年代測定の結果がでていいる。(179頁)

この記述と松本秀雄(1992)の記述を参考にして日本文化の基層を古い順に並べるならば、a)最古の文化圏が佐渡文化圏と宮古・先島文化圏、続いてb)ミズナラ文化圏を中心とする縄文人文化圏>アイヌ文化圏、c)照葉樹林文化圏を中心とする弥生人文化圏、d)焼畑文化圏>餅なし正月圏という太い流れが仮定されようか。隼人文化圏の時代的な位置づけは、はっきりしない。

3 現代文化圏の調査

アイヌ、佐渡および宮古・先島の3文化圏の調査は、境界線の認定は容易であるが、その他の地域での調査は注意を要する。居住者が結婚・就学・生業などのために居住地をかえることは多いし、高文化圏から低文化圏への文化の伝播、時代変化にともなう内部変化などが繰り返されて今日にいたつたわけであるから、日本文化の基層としての9文化圏が



図9 儀礼食山芋の分布 (坪井 1982)



図10 民家の分布 (坪井 1982)

そのまま現代日本の小文化圏に重なって生き残っているとは考えにくい。したがって、現代の小文化圏とその正確な境界線を明らかにするには、実態調査をする以外にはない。

その実態調査では、(1)植物文化圏、(2)習俗文化圏、(3)住文化の地理的分布、(4)食文化の地理的分布、(5)日本方言の境界線、(6)しぐさ・行動の地理的分布、という6分野で調査をすることで「かくれた文化」を浮き彫りにできよう。ただし、この種の調査では被調査者数（できれば20代、40代、60代のそれぞれ男女）および調査地点数がきわめて大きな数になりやすいので、調査項目数を抑えた簡易調査が望ましい。いまのところ簡易調査としては、中項目を20項目くらいに抑えた調査（Web調査を主とし、重要地点では面接調査を加える）を考えている。

(1)の植物文化圏では、ミズナラ文化圏と照葉樹林文化圏を調査する必要がある。この調査によって、日本の東西文化圏の境界がはっきりするはずである。南関東・東海・富山・石川などの地域において、森林の伐採、風によって運ばれた花粉によるアカマツやコナラ亜属の二次林の発生、宅地の造成、生活環境の都市化などの影響を受けても、照葉樹林帯の範囲が変化していないかどうかには注意して調査することが求められる。

次に(2)の習俗文化圏では、a)餅なし正月、b)儀礼食としての山芋の2項目を調査する。餅なし正月も儀礼食としての山芋も、坪井洋文(1982)の地図(図6、図9)の調査地点ないしはその近辺での追跡調査を目指し、先行調査から30年近く経過した現在での実態を把握するのが狙いである。

(3)の住文化の地理的分布も、東西文化圏の古層の範囲を明確にするための調査項目であり、坪井洋文(1982)の民家の分布図(図10)が参考になるが、地床(地面・土座)形式の民家は氏の調査時点でもほとんど消滅していたので、今回の調査では新たな項目を立てることも検討しなければならない。

前出(4)の食文化の地理的分布を明確に実証するための先行文献が乏しいため、それを補う全国規模での実態調査が必要である。調査項目は(a)雑煮、(b)寿司、(c)てんぷら、(d)おにぎり／おむすび、(e)蕎麦、(f)醤油、(g)銘々器の習慣などが考えられる。

(a)の雑煮では、餅(角餅・丸餅・大きな餅・焼餅・煮た餅)、餡入り、黄粉を添える、澄まし汁・胡桃汁・赤味噌汁・合せ味噌汁、鯨・小魚・イクラ・牡蠣・干し焼き海老、青菜・芋・蕪・大根・人参)などが重要な分類基準になるのではないかと予想され、これらの基準をもとに考えると、日本には、

- ・北海道(角餅、鯨の皮を入れ、澄まし汁)
- ・東北(角餅、イクラや焼き魚を載せ、澄まし汁、岩手の沿岸部では餅を胡桃汁に付けて)
- ・金沢・富山・新潟・長野・関東(角餅、イクラを載せ、澄まし汁)
- ・静岡・愛知
- ・近畿(丸餅)

- ・中国・四国（丸餅、餅に餡を入れたり黄粉を添えたり、広島では牡蠣を載せる、味噌仕立て）
- ・九州（丸餅、鹿児島では干し焼き海老を載せ、味噌仕立て）
- ・沖縄（餅なし）

この8文化圏の存在が予想される（カッコ内は特徴的な構成要素を示す）。照葉樹林帯ではおおむね丸餅・味噌仕立ての雑煮文化のようであるが、東日本を中心に分布するミズナラ帯は粟・稗・蕎麦・芋類の文化圏であったから、角餅・澄まし汁の雑煮地域がある一方で他の一部地域に「餅なし正月」の伝統が残存しても当然である（図4、図6参照）。

(b)の寿司は、対象とする文化地域では江戸前（新鮮なネタを使ったにぎり寿司で、マグロをはじめとする赤身のネタが中心）であるか関西風（飯が六分、ネタ四分、ネタはタイなどの白身が多く、箱型の寿司）であるかを問う。

(c)のてんぷらは、ころも揚げのてんぷらのみを意味するのか（関東）さつま揚げをも含めて言う（関西）のか、(d)のおにぎり／おむすびは、三角型の「おにぎり」（平安時代の「屯食」を語源とし、人数の多い下級役人に器を使わず握った飯を出して間に合わせた戦国時代の兵糧食の流れをくむ「握り飯」の名は江戸時代に定着）を地域文化とするか、俵形で表面に黒ごまがふってあることが多い「おむすび」（女房ことばに始まり関西一帯に勢力をもつ。祭祀の際に神への供え物にした「結び」を原型とする説も）をそれとするかを問うもの。

(e)の蕎麦は、関東では「きつね」は油揚げをのせた蕎麦・饅頭、「たぬき」は天かすの入った蕎麦・饅頭を指すのに対し、関西では「きつねは油揚げをのせた饅頭、「たぬき」は油揚げをのせた蕎麦をいう。この東西境界線がどのあたりを走っているのだろうか。

(f)の醤油は、関東では大豆と小麦をほぼ等量に使う濃口醤油、関西は大豆に小麦または米を使う薄口醤油であるが、薄口といっても関東の濃口より塩分が多い。

(g)の銘々器の習慣、つまり「わたしの茶碗」「わたしの箸」という生活習慣が残っているかどうかについて。朝鮮半島では飯碗・汁碗・箸・スプーンの4つが銘々器であるが、「わたしの茶碗」「わたしの箸」といった習慣が残っている文化であれば、かつては北方型の文化圏であったという位置づけができる。

今回の調査で設定した上記6項目は、いずれも伝統行事や日常生活に溶け込んで地域文化の中に根強く残るものばかりなので、境界線を容易に描出できるのではなかろうか。

(5)の日本方言の境界線も、次の6項目について調査すればおよそその小文化圏の境界線が明らかになるが、大量かつ質の高いデータが『日本語地図』ほかの先行調査で報告されているので、それを援用することも考慮しなければならない。

- (a) 打消しのナイ/ン
- (b) 存在のイル/オル
- (c) 断定のダ/ジャ・ヤ

- (d) 白くなる/白うなる
- (e) 出した/出いた
- (f) 起きろ/起きよ・起きい

次に、(6)しぐさ・行動の地理的分布では(a)担ぐ(b)座るという2項目を対象とするのが無難かつ効果的かと予想されるが、新鮮味に欠ける調査結果になりそうだ。かくれた文化を発掘するという意味では、できるだけ日常生活に溶け込んでいるものが多い。

1. 目を閉じ額や目を親指や人差指で擦る。
2. 話し手が話をしながら人差指を鼻の下にもっていく。
3. 他人の家を訪ねたときに、玄関でどのようなことをするか（声のかけ方、ことば、しぐさ）
4. 「おはよう」の挨拶の仕方（ことば、しぐさ）
5. 馬鹿にして罵る（ことば、しぐさ）

4 まとめと課題

本稿で検討してきた結果を整理すると、日本文化の基層は9文化圏（1.アイヌ文化圏、2.ミズナラ帯文化圏、3.焼畑農業文化圏、4.餅なし正月文化圏、5.佐渡文化圏、6.照葉樹林文化圏、7.隼人文化圏、8.琉球文化圏、9.宮古・先島文化圏）に分けられる可能性のあることが明らかになった。また、先行論文の資料を検討する過程で、次の3点が明らかになった。

1. 日本方言の五大区画が「日本文化の小文化圏」に重なるわけではない。
2. 文化圏は、遺伝子・植物・歴史・出土品・習俗・方言などを総合化して認定すべきである。
3. 日本文化の基層の上に住民の移動や時代による社会変化などが重なってきたので、現時点での小文化圏を確定するには、それを実証するための調査が必要である。

日本人の集団構造常染色体上のSNPの遺伝子型を調査した理化学研究所では、日本人7,001人と中国人45人のサンプルについて、1人あたり約14万個所のSNPの遺伝子型データを主成分分析し、日本人の大部分が本土クラスターと琉球クラスターに大別できることをつきとめ、本土クラスターの中では近畿の人は中国人のクラスターに比較的近く、東北の人は中国人のクラスターから遠く離れていることを明らかにした。このことは、照葉樹林帯文化圏の近畿人は南方型の、ミズナラ帯に属する東北人が北方型の遺伝子をもつ集団であることを意味しているのではないかと考えられるが、結論は今後の研究に譲る。

本稿では日本文化の基層と現代文化圏を対象にした調査の必要性について考察した。この考察の的確性を確認し現代文化圏の境界線を画定するべく、できるだけ早い時期に実態調査の実施にこぎつけたい。

注

- (1) 佐々木孝明（1993）では「水田稲作文化は、縄文時代晩期の末から弥生時代の初期ころに、北部九州へ伝来し、その後、急速に西日本へ展開しました……この稲作が展開する以前に、西日本一帯には……雑穀を主作物とする焼畑農耕に生業の基礎をおく照葉樹林文化が展開していました。」と説く（41頁）。
- (2) この定義は、平澤洋一（2005）による。「日本文化の調査と問題点」『日本総合学会会誌』第4号。
- (3) 松本秀雄（1992）『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』NHKブックス、105-6、176-7頁。図1は同書92頁による。
- (4) 同上107-8頁。
- (5) 同上107頁。
- (6) 同上118-9頁。
- (7) 佐々木孝明（1993）『日本文化の基層を探る』NHKブックス、216頁。図2参照。
- (8) 同上41頁。
- (9) 同上208-9頁。
- (10) 同6-9頁。
- (11) 同210～12頁を参照。
- (12) 田中 琢・佐原 真（1993）『考古学の散歩道』岩波新書、91～2頁、179頁。

参考文献

- [1] 佐々木高明（1972）『日本の焼畑』古今書院。
- [2] 坪井洋文（1982）『稲を選んだ日本人—民俗的思考の世界—』未来社。
- [3] 野村雅一（1983）『しぐさの世界』NHKブックス。
- [4] リージャー・ブロズナハン（1988）（岡田 妙・斎藤紀代子訳）『しぐさの比較文化』大修館書店
- [5] 松本秀雄（1992）『日本人は何処からきたか 血液型遺伝子から解く』NHKブックス。
- [6] 浅井信雄（1993）『民族世界地図』新潮社
- [7] 佐々木孝明（1993）『日本文化の基層を探る』NHKブックス。
- [8] 田中 琢・佐原 真（1993）『考古学の散歩道』岩波新書。
- [9] NHK「日本人はるかな旅①アンコール」（2001.12.23 PM 9：10～）
同 「日本人はるかな旅②アンコール」（2001.12.24 PM 9：10～）